

類とエイドス：アリストテレスの実体論におけるイデア論批判の意義

岩田, 圭一
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：准教授：哲学

<https://doi.org/10.15017/16919>

出版情報：哲學年報. 69, pp.41-82, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

類とエイドス

——アリストテレスの実体論におけるイデア論批判の意義——

岩 田 圭 一

一 問題の所在

アリストテレスは先行哲学者たちの学説を批判することによって自らの哲学を形成しており、彼の形而上学理論もそのようにして形成されている。(あるもの) (τὸ ὄν) を探究する形而上学理論の形成にとって、師プラトンのイデア論はとりわけ検討に値する学説であったと考えられる。実際アリストテレスは『形而上学』A巻第九章において、プラトン主義者の説くイデア論——ここでは「われわれ」の説として示されている——^①に対してかなり詳細な批判を行っている。このイデア論批判はM巻第四—五章においておおよそのまま再録されているが、この再録においては、プラトン主義者が主語になっている箇所^②で一人称は使われておらず、「彼ら」のイデア論として批判が行われている^③。また、実体論が展開される『形而上学』Z巻にもイデア論批判が含まれている

が、^③その際も三人称のものとして批判が行われている。批判という態度は一貫しているが、批判の対象となる側を一人称で呼ぶことから三人称で呼ぶことへと変化することはアリストテレスの心情の変化を表しており、興味深いところである。彼にとってイデア論は単なる論敵の学説ではなく、彼がもともと所属していた一派の学説なのであり、その点からも、アリストテレスの形而上学理論の形成を考える上でイデア論が無視できないものであることがわかるだろう。アリストテレスがイデア論批判に力を注いだのも、イデア論の影響を受けている自身の実体論をイデア論から明確に区別する必要があったからだと考えられる。とくに「形相 (εἶδος)」という概念は言葉としてはプラトンのイデアを示す「エイドス (εἶδος)」と同じであり、プラトン主義者がアリストテレスの実体論に触れる場合にそれらを混同してしまったであろうことは十分予想される。いずれにせよ、イデア論批判はアリストテレスの実体論の中で実際に行われており、われわれは実体論の解釈のためにもそこに見られるイデア論批判の意義を見定める必要がある。ここではまず、『形而上学』Z巻第十二章までの論述の概要と、本稿で取り上げる問題が含まれるZ巻第十三—十六章の論述の概要を簡潔に説明し、その上で本稿の目的を提示するとにしたい。

アリストテレスは『形而上学』Z巻の実体論において個別の実体の〈実体〉(οὐσία)を探究し、個別の実体の本質 (τοῦ τί ἐστιν εἶναι) ないし形相が〈実体〉であるという見解を提示している。この見解は、〈実体〉と考えられる四つの候補——「基体 (τὸ ὑποκείμενον)」、^④「本質」^⑤、「普遍 (τὸ κοινόν)」^⑥、「類 (τὸ γένος)」^⑦ (Z3. 1028b34-36) ——の検討を通じて明らかにされる。まずZ巻第三章において「基体」が検討され、基体としての質料は〈実体〉ではないことが確認され、^⑧基体としての形相が〈実体〉であることが示唆される。そしてZ巻第四—六章において質料形相論の観点を含まない形で〈実体〉としての本質の解明が行われ、本質をもつのは実

体 (ousia)⁶⁾ であり、また実体はその本質と同一であるということが主張される。この同一性は、実体の質料的部分が考慮に入っていないために成り立っており、その限りに於いて、実体は本質そのものであり〈実体〉であることになる。これに対してZ巻第十一章では、質料形相論の観点に立ってあらためて〈実体〉としての本質について考察され、質料と形相からなる結合体における形相の部分が当の結合体の〈実体〉であり本質であることが明らかにされる。そして続くZ巻第十二章では、〈実体〉としての形相が類と種差によって定義されることに関して、類と種差という二つの要素からなる定義が一つの定義であるのはどうしてかという定義の一性の問題が考察される。

Z巻第十二章までの考察、すなわち、〈実体〉の候補としての「基体」と「本質」に関する考察によって、個別の実体の本質ないし形相が〈実体〉であるということが明らかになるのだが、それらの考察を見る限り、〈実体〉としての本質ないし形相は普遍的なものであると考えられる。なぜなら本質ないし形相は一方で、質料に述語づけられるものとして普遍的であり、また他方で、類と種差による定義の対象として普遍的であるからである。しかし〈実体〉の残り二つの候補、すなわち「普遍」と「類」の検討が開始されると、普遍的なものとしての〈実体〉という見解は認めがたくなってくる。というのもアリストテレスは、「普遍」と「類」の検討を行うZ巻第十三—十六章において、いかなる普遍も〈実体〉ではないという主張を行っているからである。この主張はZ巻第十三章において提示され、そこでその主張の正当化が行われている。続くZ巻第十四章では、プラトン主義者の説くイデア論に焦点が当てられ、エイドス(種的イデア)¹⁰⁾がイデアとしての類と種差からなるという前提のもとで、とくに類が〈実体〉ではないことが示される。そしてZ巻第十五章では、個別の実体やエイドスが定義されないものであることが明らかにされる。Z巻第十六章では、動物の諸部分と単純物体、一なるもの

と（あるもの）、そしてエイドスについて、それらが（実体）ではないことが示された上で、その章の末尾（Z16, 1041a3-5）で、Z巻第十三—十六章における「普遍」と「類」に関する考察の要点が簡潔に述べられている。

いかなる普遍も（実体）ではないという主張の正当化に際してZ巻第十三章で提示された見解、すなわち、個別の実体の（実体）は当の個別の実体に固有のものであり、それゆえ個別的な形相ないし本質こそが（実体）であるという見解については、それに伴う解釈上の問題とともに、すでに詳しく論じた¹⁸⁾。本稿では、Z巻第十三章に続くZ巻第十四—十六章のうち、いかなる普遍も（実体）ではないという主張をイデア論の場合で確認しているZ巻第十四章と、個別の実体やエイドスの定義不可能性が明らかにされるZ巻第十五章を取り上げ、イデア論批判となつているそれらのテキストを検討することにした。以下ではまず、アリストテレスがZ巻第十四—十五章においてイデア論批判を行う契機となつた問題、すなわち、Z巻第十三章の末尾に提示されている（実体）の定義不可能性の問題を取り上げる。その上で、Z巻第十四章のテキストに向かい、イデアとしての類に対するアリストテレスの批判を詳しく見る。それから、Z巻第十五章における個別の実体やエイドスの定義不可能性に関する論述の中から、とくにエイドスの定義不可能性に関する論述を取り上げ、アリストテレスが行っている批判を明確にすることにした。そして最後に、それまでの批判を通じて明らかになつた「エイドス」理解を踏まえて、アリストテレス自身の言う「形相」について、定義の問題も含めて考察することにした。これによって、Z巻第十四—十五章におけるイデア論批判がZ巻の実体論においていかなる意義をもっているかが明らかになるだろう。

二 〈実体〉の定義不可能性の問題

アリストテレスはZ巻第十三章の末尾で、その章における自身の主張によれば〈実体〉が定義されえないことになるという問題を次のように示している。

もしいかなる〈実体〉も、「普遍が」「このような」もの (το τοῦδε) を示すのであつて或るこれ (τὸδε) を示すのではないという理由で、諸々の普遍からなることができないのなら、またもしいかなる〈実体〉も、現実的に (ἐνδεχεται) 「その〈実体〉のうち」にある諸々の〈実体〉からなる複合体 (σύνθετον) ではありえないのなら、〈実体〉はすべて非複合的なもの (ἀσύνθετον) であることになり、その結果、いかなる〈実体〉にも説明方式 (λόγος) がないことになるだろう。(Z13, 1039a14-19) (「」は筆者による挿入。)

ここに引用した一文の条件節において、Z巻第十三章におけるアリストテレスの主張が述べられていると考えられる。この条件のもとで〈実体〉の定義不可能性という問題が生じると言われている。その条件節では、いかなる〈実体〉も諸々の普遍からなることができないということと、いかなる〈実体〉も諸々の現実的な〈実体〉からなる複合体ではありえないということが語られている。後者については、確かにZ巻第十三章において、プラトン主義者の反論に対する再反論という形で主張されていた(Z13, 1039a3-8)。その再反論においてアリストテレスは、現実的に一つである〈実体〉が、現実的にある諸々の〈実体〉からなることは不可能であると主張し、現実的に一つである〈実体〉の諸要素が可能的なものにすぎないことを示している。例えば仮に或る〈実体〉が

二足と動物からなっているとしたり、それら二足と動物は現実的にある〈実体〉ではなく、可能的にあるものには足りないと言うのである¹⁴⁾。右の条件節の後者についてはこのように説明されている。しかし前者については、明示的には語られていないように思われる。Z巻第十三章では、いかなる〈実体〉も普遍ではありえないということとは語られているが、いかなる〈実体〉も諸々の普遍からなることができないとは語られていない¹⁵⁾。アリストテレスは右の引用で、Z巻第十三章のそれまでの考察において主張していなかったことを、新たに付け加えたということなのだろうか。

この問いに答えるには、いかなる〈実体〉も諸々の普遍からなることができないと言われる際に付け加えられている理由に注意する必要がある。その理由とは、普遍は「このような」ものを示すのであって或るこれを示すのではないというものである。ここで、Z巻第十三章の一節(Z13, 1038b23-29)——プラトン主義者による反論(Z13, 1038b16-23)のすぐ後——において、〈実体〉が性質からなるものではないことが主張されていたことを思い起こすべきである。アリストテレスはその一節において、〈実体〉が諸々の〈実体〉からなる可能性を残しつつ、〈実体〉が性質からなることの不合理を説いている。すなわち、もし〈実体〉が性質からなるとしたら、〈実体〉よりも性質のほうがより先のもの(優位なもの)となるが、これは不可能であると述べている¹⁶⁾。いま問題にしている右の引用では、普遍は或るこれではなく「このような」ものであるがゆえにいかなる〈実体〉も諸々の普遍からなることはできないと言われているが、これは、ここで思い起こした一節で言われていたこと、すなわち、〈実体〉は性質からなることができないということを前提にした主張であると考えられる。普遍が「このような」ものとして性質にたとえられて理解されることは、『カテゴリー論』にも見られることである(Cat. 3b13-16)。そうすると、右の条件節の前者で言われている主張、すなわち、いかなる〈実体〉も諸々の普遍からなる

ことができないという主張は、新たに付け加えられたものではなく、Z巻第十三章における論述にもともと含まれていた主張であると言うことができるだろう。

それでは、この条件のもとでどのようにして〈実体〉の定義不可能性の問題が生じるのかを見てみよう。右の引用はZ巻第十三章における主張を踏まえたものであるから、そこで言われる〈実体〉とは、個別的実体に固有の個別的な形相であると考えられる。〈人間〉という普遍的な形相が念頭に置かれているのだとしたら、それについては「二足動物」という定義が可能であり、その要素である二足と動物のあり方を問題にすることができただろう。プラトン主義者なら、二足と動物を〈人間〉よりも普遍的な〈実体〉としてのアイデア——〈二足〉と〈動物〉——とみなすにちがいない。アリストテレスの場合は、Z巻第十二章の論述によるなら、動物という類は質料に比せられ、定義において省略可能であり、二足という最下の種差が定義されるべき形相そのものだとということになるだろう（Z12, 1038a5-6, 19-20, 25-26）。しかし右の引用で問題にされているのは、Z巻第十三章の考察によって〈実体〉と認められた個別的な形相である。例えばソクラテスという個別的実体に固有の個別的な形相が問題になっているのである。ソクラテスに固有の個別的な形相は、右の引用によれば、非複合的なものである。アリストテレスは、非複合的である個別的な形相には定義がないと考えている。個別的な形相が非複合的なものであることから、それが定義されえないものであることを引き出すことができるのは、そこに或る前提があるからである。その前提とは、定義と定義される事物とが、また定義の部分と定義される事物の部分とが対応していなければならないというものである（Z10, 1034b20-22）。この前提のもとでは、定義の部分に対応するべき実在的な部分をもたないもの（非複合的なもの）は、定義されえないものであることになる。このようにして個別的な形相としての〈実体〉の定義不可能性が示されるのであるが、アリストテレスはZ巻第十二章までの考

察の結果を考慮して、〈実体〉の定義不可能性という結果が問題のあるものであることを以下のように示している。

しかしすべての人にそう思われ、また前に「われわれによつて」言われたことでもあるが、定義 (opos) をもっているのは〈実体〉だけであるか、あるいはとりわけ〈実体〉である。しかしいま、それ（〈実体〉）には定義がないことになる。そうすると、いかなるものにも定義 (opos) がいないことになるだろう。あるいは、〈実体〉には、或る意味では「定義が」あるが、他の意味ではないということだろう。「ここで」言われていることは、以下の論述からいつそう明らかになるだろう。(Z13, 1039a19-23)

この引用で、すでに言われたこととして、「定義をもっているのは〈実体〉だけであるか、あるいはとりわけ〈実体〉である」と言われているのは、Z巻第四―六章やZ巻第十一―十二章での考察を振り返つてのことである。それらの考察を踏まえると、定義をもっている〈実体〉とは普遍的な形相ないし本質であると考えられる。^①しかし右の引用では、定義される〈実体〉が普遍的な形相ないし本質であるべきことには触れられず、ただ、〈実体〉のみが定義されるということが、Z巻第十二章までの論述において明らかにされたこととして挙げられている。Z巻第十三章における主張によれば、個別的な形相のみが〈実体〉であり、Z巻第十二章までの論述において〈実体〉と認められていた普遍的な形相はもはや〈実体〉とはみなされない。そうすると、〈実体〉のみが定義されるはずであったのに、いまやその〈実体〉も定義不可能であることが明らかになり、その結果、「いかなるものにも定義がないことになる」という困難な結論に至つてしまうのである。

このようにアリストテレスは〈実体〉の定義不可能性を問題のある結果とみなすのであるが、このことは、〈実体〉は定義可能なものでなければならぬとアリストテレスが考えていたことを示している。しかし、個別的実体に固有の個別的な形相という非複合的な基体²²⁾こそが〈実体〉であるというZ巻第十三章における主張を、提示した同じ章においてすぐに取り下げられるのも難しいにちがいない。要するにアリストテレスは、〈実体〉性の基準として、基体性をとるか、定義可能性をとるかで揺れているのである。²³⁾ Z巻第十三章における主張を見る限りでは、基体性が〈実体〉性の基準として採用されていると言えるが、その章の最後で〈実体〉の定義不可能性を問題視するということは、アリストテレスがやはり定義可能性という基準も捨てがたいと考えていることを示している。このような揺れがアリストテレスに、右の引用にあるように、「〔〈実体〉には〕或る意味では〔定義があるが、他の意味ではないということだろう〕と言わせたのだと考えられる。しかし右の引用における「〈実体〉が個別的な形相を指す限り、それに定義はありえないように思われるが、なぜアリストテレスは「或る意味ではある」と言っているのだろうか。

この問いに対しては、個別的な形相の捉え方に注意することによって何とか説明を与えることができるのではないかと思う。個別的な形相はそれ自体としてはどうしても定義されえないが、もしそれを普遍化することが許されるなら、事情は変わってくる。もちろん、個別的な形相を普遍化した普遍的な形相は、Z巻第十三章における主張によれば、〈実体〉ではない。したがって、普遍的な形相に定義があると語ったからといって、〈実体〉に定義があることにはならないように思われる。しかし「或る意味で」と言われていることの意味に注意すれば、〈実体〉に定義があると言えなくはないことがわかるだろう。すなわち、「或る意味で」を「派生的な仕方で」と捉えるのである。つまり、個別的な形相としての〈実体〉は、普遍化されることを通じて派生的に定義をもって

いと考えるのである。個別的な形相はそれ自体としては定義をもっていないが、その普遍化されたものである普遍的な形相が定義をもつという仕方、派生的に定義をもつていとみなすのである。個物と普遍に関するアリストテレスの見解において普遍は個物なしには存在することができないのだから、定義をもつ普遍的な形相があるときには、その基体として個別的な形相がなければならぬ。普遍的な形相は、個別的な形相から端的に離れてそれ自体で存在するようなものではないのである。そして個別的な形相は、そのような普遍的な形相を介して定義をもつのである。アリストテレスは形相を「説明方式において離在可能なもの (τὰ λόγια χωριστῶν)」と特徴づけるが (H1, 1042a29)、「この離在可能性という特徴はまさに個別的な形相にあてはまるものである。個別的な形相そのものは定義不可能であるが、説明方式においてそれが離在するとき、それは普遍的な形相として定義可能なものとなるのである。」²⁴⁾ このような説明はアリストテレス自身が行っているものではないが、右の引用におけるアリストテレスの揺れを説明することのできる一つのありうる解釈であると言えるだろう。

右の引用の最後に、「**実体**」に定義がある場合とない場合とについて、「以下の論述からいっそう明らかになるだろう」と述べられているが、これはZ巻第十五章の論述を指していると考えられる。²⁵⁾ Z巻第十五章では、個別の実体やエイドスに定義がないことが示されるのであるが、それに先立つ部分 (Z15, 1039b20-27) で、「説明方式」として捉えられる「形相」への言及があり (Z15, 1039b20, 22-24, cf. Z10, 1035b13, 15, H1, 1042a28, 31)。²⁶⁾ その部分において、個別的な形相を普遍化したものとしての普遍的な形相の定義可能性が暗に示されているのだと解することが可能だろう。「**実体**」に定義がある場合については、Z巻第十三―十六章ではその暗示以外に説明はない。実際のところ、「**実体**」の定義についてはZ巻第十二章までの論述で十分に語られており、アリストテレスはそれ以上の説明は必要ないと考えたのだろう。「**実体**」に定義がない場合については、Z巻第十四―

十六章において何らかの説明が行われることが期待されるが、それについての説明も行われていない。その代わりにアリストテレスは、個別の実体やエイドスに定義がないことをZ巻第十五章で説明している。いずれにせよ、アリストテレスはZ巻第十三章を終えたところですぐにこの定義の問題に向かうことはせず、Z巻第十三章でその正当化を行った主張、すなわち、いかなる普遍も〈実体〉ではないという主張をイデア論の場合で確認するという作業に向かう。実質的にイデア論批判となっているそのテクストをこれから検討することにした。

三 イデアとしての類

アリストテレスはZ巻第十三章の一節(Z13, 1038b16-23)において、いかなる普遍も〈実体〉ではないという主張に反対するプラトン主義者の反論を取り上げていた。この反論は、或る〈実体〉の定義のうちに含まれる類——その〈実体〉よりも普遍的なものである——もまた〈実体〉であるという仕方では普遍的〈実体〉性を認めさせようとするものであった。²⁷⁾ アリストテレスはこの反論に再反論するにあたって、「可能態—現実態」の対概念を持ち出し、類が現実的にあるものではないことを指摘した(Z13, 1039a3-8)。²⁸⁾ プラトン主義者の反論はこのようにZ巻第十三章の中で一応片づけられるのであるが、アリストテレスはZ巻第十四章において、再びプラトン主義者のその反論を引き合いに出す。ただし今度は、或る〈実体〉の定義のうちに含まれる類の〈実体〉性というプラトン主義者の主張を、より直接的にプラトン主義者の主張として、すなわち、或るエイドスのうちに含まれるイデアとしての類の〈実体〉性という主張として提示している。²⁹⁾ アリストテレスはZ巻第十四章において、この主張の不合理を示すことによって、いかなる普遍も〈実体〉ではないという自らの主張が正しいことを確認

している。本節では、アリストテレスがプラトン主義者の主張の不合理をどのように示しているのかをテクストに即して明らかにすることにした。

アリストテレスはZ巻第十四章の冒頭で、プラトン主義者のことを、「諸々のアイデアを離在可能な〈実体〉³⁰⁾である (τὰς ἰδέας … οὐκ ἔστιν ἐκχωριστὰς εἰναι) と言ふ、同時にエイドス (εἶδος) を類と諸々の種差からなるとする人々」と説明し、Z巻第十三章での考察からすれば彼らの見解は不都合な結果に陥るだろうということを示唆している (Z14, 1039a24-26)。その上で、Z巻第十四章における問題提起として、「もし諸々のエイドス (ἰδέων)³¹⁾が存在し、〈動物〉[「という類」]が〈人間〉や〈馬〉[「といったエイドス」]のうちにあるなら、それ[〈動物〉]は数において (τὸ ἀριθμικόν) 一つで同じものであるか、それとも異なるものであるかのいずれかである」 (Z14, 1039a26-28) と述べ、〈人間〉や〈馬〉といったエイドスの構成要素である類を数において一つであるとした場合と、異なるとした場合とについて順に検討していく。アリストテレスの説明によれば、類が説明方式において一つであることは明らかであるので、³²⁾ その意味での二性は問わず、むしろ数において一つであるかどうかを問うのだという (Z14, 1039a28-30)。エイドスの構成要素としての類が数において一つであるかどうかを問うにあって、アリストテレスはまず、イデア論が前提になっていることを次のように確認している。

そうして、もしそれ自体で存在する (αὐτὸς καθ' αὐτὸν) 或る〈人間〉——これは或るこれ (τὸδε τι) であり、離在している (ἐκχωρισμένον) ——が存在するなら、それらから[その〈人間〉]がなっているところのそれら (ἐξ ὧν)、例えば〈動物〉と二足も、或るこれを示し、離在可能なもの (χωριστὰ) であり、〈実体〉であるのでなければならぬだろう。 (Z14, 1039a30-32)

Z 卷第十三章の一節 (Z13, 1038b16-23) におけるプラトン主義者の主張では、類と種差からなるものとしての〈人間〉がアリストテレスの言う本質ないし形相であると解された上で、本質ないし形相よりも普遍的である類もまた〈実体〉であると主張されていた。これに対して右の引用では、類と種差からなるものとして、〈人間〉というエイドスが考えられている。それは、「それ自体で存在する或る〈人間〉」³⁵という言い回しからも明らかである。この引用において、エイドスとしての〈人間〉は「或るこれ」、「離在している」ものと特徴づけられ、〈実体〉とみなされている³⁶。そしてその構成要素として見出されるイデアとしての〈動物〉と〈二足〉も「或るこれ」と特徴づけられる〈実体〉とされているが、「離在している」ものではなく「離在可能なもの」と特徴づけられている点が気にかかる。というのも、それらがイデアであるなら、「離在可能なもの」よりも「離在している」ものと特徴づけられるべきだからである。なるほど、より普遍的なもののほうがより先に存在するというプラトン主義者の前提によれば、〈動物〉と〈二足〉は「離在している」ものと特徴づけられるべきだろう。しかし注意しなければならないのは、この文脈において〈動物〉と〈二足〉は〈人間〉の構成要素として見出されたもの、ということである。それらは〈人間〉の構成要素であるのだが、〈人間〉よりも普遍的で優位な〈実体〉であるため、〈人間〉から離在可能であると言われたのだと考えられる。つまり、〈人間〉の構成要素という点から〈動物〉と〈二足〉の存在を考える限りにおいて、それらは「離在可能なもの」と特徴づけられうるのである。いずれにせよ、ここでアリストテレスはエイドスも、その構成要素である類と種差も、プラトン主義者にとってはイデアとして存在するのだということを確認している。

さて、イデア論の前提が明らかになったところで、Z 卷第十四章における問題提起の考察に向かうことにしよう。まず、エイドスの構成要素としての類が数において一つであるとした場合を見ることにしよう。アリストテ

レスはこれについて以下のように説明している。

そうして、もし「馬」(というエイドス)のうちにある「(動物)」と「(人間)」(というエイドス)のうちにある「(動物)」が同じ一つのものであるなら——君が君自身と同一であるように——、離れてあるものども「(エイドスとしての「馬」と「人間」)」のうちにある一つのもの (το ἐν τοῖς οὐοῖς ἕκαστος) (「(動物)」はどのようにして一つのものであるのだろうか。そしてなにゆえその「(動物)」はそれ自身から離れてあるのでもないのだろうか。(Z14, 1039a33-b2)

すでに見たように、イデア論の前提においては、「馬」や「人間」といったエイドスも、その構成要素である「(動物)」も、「(実体)」である。「馬」と「人間」は異なる「(実体)」であるが、それらの構成要素である「(動物)」はそれらに共通する普遍として存在するはずである。しかしこの共通の普遍はイデア論の前提では、アリストテレスの言う普遍とは異なり、「(実体)」とみなされている。つまり「(動物)」は、「馬)」にとっても「(人間)」にとっても共通である一つの「(実体)」とみなされている。これは、アリストテレスの言う普遍ではなく、個物のように存在する一つの「(実体)」である (cf. B2, 997b5-8)。しかしもともと「(動物)」は、「馬)」の構成要素、「(人間)」の構成要素として見出されたものである。そこでアリストテレスは、「馬」と「人間」のそれぞれのうちにある「(動物)」がどのようにして一つの「(実体)」であるのかと問うのである。そしてさらに、この問いに続けて、一つの「(実体)」であるはずの「(動物)」が「馬」と「人間」のそれぞれのうちにあることを、「(動物)」がそれ自身から離れて——別々に分離して——あることだと理解して、その困難さに、「なにゆえその「(動物)」はそれ自身から離れてあるの

もないのだろうか」と不満を述べている。¹⁷⁾一つの〈実体〉である〈動物〉が分離して、その一方が〈馬〉のうちに、もう一方が〈人間〉のうちにあると言ってしまうことは、一つの〈実体〉としての〈動物〉の自己同一性を妨げる困難な主張なのである。このようにして、エイドスの構成要素としての類の数的一性は不合理であることが明らかになる。

次にアリストテレスは、エイドスの構成要素としての類と種差との関係を問題にする (Z14, 1039b2-6)。「馬」に関してその類と種差との関係を考えてと、それは〈四足〉である〈動物〉¹⁸⁾なのだから、そこには、〈動物〉が〈四足〉を分有している関係が成り立っているように見える。というのも、例えば勇氣あるソクラテスが存在するとき、プラトン主義者はそこに、ソクラテスが〈勇氣〉というイデアを分有していることを見出すからである。しかし〈動物〉がソクラテスと同じ仕方で基体であると考えることには問題がある。ソクラテスは個別の実体であり、勇氣がある場合も、反対に臆病である場合もありうるが、勇氣があると同時に臆病であることはない。言い換えれば、ソクラテスは〈勇氣〉というイデアとその反対の〈臆病〉というイデアを同時に分有することはない。これに対して〈動物〉は、それが〈馬〉にも〈人間〉にも共通である普遍である限りにおいて、「二足であること」と「四足であること」とが同時に成り立つものであるはずである。つまり〈動物〉は、その普遍性を考慮する限りにおいて、「二足」と〈四足〉を同時に分有するはずだと考えられる。しかしイデア論の前提において〈動物〉は一つの〈実体〉であり、そのような〈動物〉が「二足」と〈四足〉を同時に分有することは不合理である。アリストテレスはそれをこのように語っている。「それ〔動物〕が「二足」と〈多足〉〔二足より多くという意味での〕¹⁹⁾を分有するとしたら、或る不可能なことが帰結することになる。すなわち、反対のものが同時に、同じ一つのもの、或るこれであるものに属することになる」(Z14, 1039b2-4, cf. Z12, 1037b18-21)と。このようにし

て、エイドスの構成要素としての類と種差との間に分有の関係を認めることの不合理が明らかになる。アリストテレスはさらに、〈動物〉が〈二足〉でも〈四足〉でもある必要があることについて、分有以外の可能性——〈二足〉と〈四足〉が一緒に置かれているとか接触しているとか混合されているといった——に言及しているが、いずれの可能性も不合理だとして退けている（Z14, 1039b5-6）。イデア論の前提に立つとき、類と種差との関係は捉えがたいものとなってしまっているのである。

エイドスの構成要素としての類的数的一性が不合理であること、そしてその場合の類と種差との関係を分有その他によって説明することが不合理であることを明らかにしたところで、アリストテレスは、エイドスの構成要素としての類的数を数において異なるものである——一つではない——とした場合にどうなるかを検討する。〈馬〉のうちにある〈動物〉と〈人間〉のうちにある〈動物〉を数において異なるものとみなすことは、〈動物〉がもともと〈馬〉や〈人間〉の構成要素として見出されたことと調和する。もちろん、イデア論の前提によれば、〈動物〉は「或るこれ」であり離在している一つの〈実体〉であるのだから、類的数的多数性という前提を立てると自体に問題があるとも言える。しかしアリストテレスはもともと類をエイドスの構成要素として見出したのであり、この点からすれば、むしろ類的数的多数性という前提は自然であると言える。もちろん結果的には、イデア論の前提が持ち出され、類的数的多数性の不合理が示されることになる。この不合理を明らかにするにあたってアリストテレスはまず、エイドスの構成要素としての類が数において異なるとした場合、エイドスが無限に近いほど存在することになると述べている（Z14, 1039b7-8⁴⁰）。このことがどのような意味で不合理であるのかについては説明されず、すぐにもう一つの説明が行われる。それは以下のとおりである。

さらに、多くのもの (τοῦλα) が〈動物〉それ自体 (αὐτὸ τὸ ζῷον) であることになるだろう。というのもそれぞれのものうちにある〈動物〉は〈実体〉であるからである…〔中略〕…。そしてさらに、〈人間〉〔というエイドス〕がそれらからなっているところのすべてのものはイデア (ἰδέα) であるからである。そうすると、それ〔〈動物〉それ自体〕が或るもののイデア (ἀλλοῦ ἢ ἰδέα) であり他のものの〈実体〉〔イデア〕 (ἀλλοῦ ὁ οὐσία) であるということはないだろう (なぜならそれは不可能なことだから)。そうすると、〈動物〉それ自体とは、諸々の動物 (〈人間〉や〈馬〉) といったエイドス〕のうちに一つずつある〈動物〉のそれぞれであることになるだろう。(Z14, 1039b9-14)

この引用においてまず言われているのは、エイドスの構成要素としての〈動物〉が数において異なるとしたら、多くのもの——〈人間〉のうちにある〈動物〉や〈馬〉のうちにある〈動物〉など——が〈動物〉それ自体(イデア)であることになるということである。〈人間〉のうちにある〈動物〉や〈馬〉のうちにある〈動物〉などを「多くのもの」とみなすことができるのは、アリストテレスがここでイデア論の前提を持ち出しているからである。「それぞれのものの中にある〈動物〉は〈実体〉であるから」という説明が、まさにイデア論の前提である。〈人間〉のうちにある〈動物〉、〈馬〉のうちにある〈動物〉などのそれぞれが〈実体〉であるということは、〈動物〉が数多く存在するということにほかならない。その後でアリストテレスは、〈人間〉の類が〈動物〉で間違いないうことを確認し (Z14, 1039b10-11) ——右の引用では省略した——、その上でイデア論の前提において〈人間〉の構成要素はすべて——類も種差も——イデアとみなされることをあらためて確認している。つまりイデア論の前提においては、数多く存在する〈動物〉はすべてイデアであることになる。そしてその結果としてアリストテ

レスは、「それ（動物）それ自体」が或るもののイデアであり他のものの（実体）「イデア」であるということはないだろう」と述べている。エイドスの構成要素としての（動物）が多数存在し、それらが（動物）それ自体（イデア）であるとした場合、（動物）それ自体は、（人間）のイデアであり（馬）の（実体）（イデア）であるというように、（人間）にも（馬）にも共通するイデアであることができなくなるのである。類としての（動物）それ自体は本来、（人間）や（馬）といった多くのものに共通する普遍としての性格をもっている。ところがいまや（動物）それ自体は、そのような性格をもつイデアではなく、（人間）には（人間）のイデアとしての（動物）が、（馬）には（馬）のイデアとしての（動物）が別々に多数存在することになるのである。類の数的多数性の不合理を示す議論は、右の引用の最後にあるように、その引用の最初に述べたこと、すなわち、多くのものが（動物）それ自体であることになるということへの言及によつて締めくくられる。ここで、アリストテレスが最初に、エイドスが無限に近いほど存在すると語っていたこと（Z14, 1039b7-8）を思い起こすと、多くのもの——多くのエイドスのそれぞれのうちにある（動物）——が（動物）それ自体であることになるといふ結論は、（動物）というイデアがほとんど無限に存在することを意味することだとわかるだろう。或るイデアがほとんど無限に多く存在することになるといふ結論は、イデアを一つの（実体）とみなすプラトン主義者にとってはなほだ不都合なものである。アリストテレスはこのようにして、類の数的多数性が不合理であることを示すのである。

プラトン主義者の見解の不合理を示すアリストテレスの試みはさらに続く。エイドスの構成要素としての類が多数存在するとなると、それら多数の類がいずれも同じ種類のものであることの原因となる、より上位のものが存在するはずである。アリストテレスは、イデア論の前提においては、多数存在する（動物）それ自体をそのものとして存在させる、さらなる（動物）それ自体が存在してはならないことを指摘するのである。「そ

れ「多数存在する（動物）それ自体」は何からなっているのか（*ek tivos touto*）（Z14, 1039b14）と問うアリストテレスは、それら多数の（動物）それ自体の（実体）であるさらなる（動物）それ自体がプラトン主義者には必要であることを考えている。それゆえにアリストテレスはその問いに続けて、「それ（多数存在する（動物）それ自体）はどのようにして「さらなる」動物それ自体からなっているのか」（Z14, 1039b14-15）と問うのである^①。多数存在する（動物）それ自体とさらなる（動物）それ自体との関係については、すでに見た、（人間）や（馬）といったエイドスと（動物）それ自体との関係における問題と同様の問題を提起することができるだろう。すなわち、多数存在する（動物）それ自体それぞれのうちにあるさらなる（動物）それ自体は、数において一つであるのか、それとも異なるのかと問うことができるだろう。この問いに対してどちらの答えを選択しようとも困難に陥ることは、すでに見たことから明らかである。

これまで見てきたZ巻第十四章における論述は、エイドスの構成要素としての類もまたアイデアであり（実体）であると考えられるプラトン主義者の見解を批判したものである。これによってその存在が否定されるのはアイデアとしての類であって、類と種差からなると言われるエイドスではない。しかしこれは、Z巻第十四章における課題がエイドスに対する批判ではないということであって、アリストテレスがエイドスの存在を認めていたということではない。実際、アリストテレスはこの章のおわりで、エイドスの存在も認めがたいことに言及している。エイドスを問題にする際には、エイドスを分有する個々の感覺的事物との関係が問題になる。例えば個々の人間とは別に、それらの存在の原因である（人間）というエイドスが存在するかどうか、また個々の人間と（人間）との関係は分有によって説明されるのかどうかといったことが問題になる。感覺的事物の存在の原因とされるエイドスについては、Z巻第十四章のおわりで以下のように述べられている。すなわち、「感覺的諸事物の場合

には、以上のことが帰結するとともに、以上のことよりもさらに不合理なことが帰結する」(Z14, 1039b16-17)と。感覚的事物とエイドスとの関係についても、エイドスと類との間に生じた数的一性の問題が生じるということが示唆されている。また、エイドスと類はともにイデアであつたが、感覚的事物とエイドスの場合、生成消滅するものとイデアとの関係が問題になるので、さらに不合理なことが帰結すると言われている^(註)。このようにアリストテレスはZ巻第十四章において、イデアとしての類への批判を課題としながら、最後にエイドスについて、より不合理な帰結が生じることに言及し、イデア論に全面的に反対であることを表明するのである。

四 エイドスの定義不可能性

アリストテレスはZ巻第十四章において、エイドスの構成要素としての類に焦点を当てて、イデア論が不合理な学説であることを明らかにしたが、続くZ巻第十五章では、Z巻第十三章の末尾(Z13, 1038a14-23)で提起した(実体)の定義不可能性の問題との関連で、個別の実体やエイドスの定義不可能性を取り上げる。本節では、とくにエイドスの定義不可能性に関する論述を取り上げるが、その前に個別の実体の定義不可能性についても簡単に見ておくことにしたい。

アリストテレスはZ巻第十五章において、まず個別の実体の定義不可能性を明らかにしている。その定義不可能性の理由は、個別の実体——質料と形相からなる結合体——が、その質料のゆえに生成消滅するものであることに求められる(Z15, 1039b29-31)。アリストテレスは、生成消滅や変化をこうむる個別の実体には論証や定義はないと考える(Z15, 1039b27-29, 1040a1-2)。生成消滅する個々の人間とは区別される普遍的な形相としての

〈人間〉を「二足動物」と定義することができるのは——この定義が正しいと仮定して——、〈人間〉が常に「二足動物」と説明されうるからである。これに対して個別の実体としてのソクラテスは、それが健全に存在しているときは「二足動物」と言えるが、消滅してしまえばもはや「二足動物」とは言えなくなる。論証や定義は必然的なものについて成り立つ (Z15, 1039b31-32) のだから、個別の実体としてのソクラテスは「二足動物」という定義の対象ではないのである^⑧。アリストテレスはこのように、個別の実体が生成消滅するものであることに着目してその定義不可能性を明らかにしている。

続いてエイドスの定義不可能性が明らかにされるのだが、これについては、個別の実体の定義不可能性の場合とは異なる説明が必要になる。個別の実体は、生成消滅するものであるがゆえに定義されえないと言われている。もしエイドスが生成消滅するものであるとしたら、個別の実体の場合と同じ説明でよいことになるだろうが、エイドスは永遠的なものであるので、異なる説明が必要になる。アリストテレスは、「いかなるアイデアも定義され (opioadhai) えな^⑨」 (Z15, 1040a8) ことを理由づけるにあたって、「アイデアは、彼ら〔プラトン主義者〕が主張するように、個物の部類に属し (τῶν … κατ' ἐκαστον ἡ ἰδέα)^⑩ 離在可能なもの (χωριστῆ) だからである」 (Z15, 1040a8-9) と説明している。この説明を見ると、アリストテレスはあたかも、エイドスは個別の実体と同じ意味で個物であるから定義されえないと言っているかのようである。しかし実際はそうではない。というのもエイドスは、生成消滅する個物ではなく永遠的な個物だからである (B2, 987b5-8)。一般的には天体が永遠的な個物とみなされるのであるが (Z15, 1040a28-29, A1, 1069a30-31)、プラトン主義者の見解においてはエイドスも永遠的な個物であることになる。エイドスが永遠的な個物とみなされるのは、感覚的事物からの離在可能性という特徴のゆえであると考えられる。いま見た引用においてアリストテレスはアイデアを「離在可能なもの」と表

しているが、これは厳密には「離在しているもの」と表すべきである。なるほど、エイドスを分有している感覺的事物の存在からエイドスについて考えるなら、エイドスは感覺的事物から離在可能なものであると言うこともできるだろう。しかしプラトン主義者の見解では、エイドスは感覺的事物より優位な存在であり、感覺的事物に先立って存在している。その意味でイデアは、「離在しているもの」と特徴づけられるべきである。ともかくアリストテレスはまず、エイドスの定義不可能性を、エイドスが永遠的な個物であるということによって理由づけている。ただ、これだけでは説明不足であり、さらに説明が加えられる必要がある。

アリストテレスはさらなる説明として、そもそも定義とはどのようなものでなければならぬかということから始める。その説明によると、定義とはいくつかの語 (*λογματα*) からなっており (Z15, 1040a9-10) しかもそれらの語は「すべての人に共通なものとして確立している語 (*τὰ … κείμενα κοινὰ πάντιν*)」 (Z15, 1040a11) でなければならぬという。特定の一つのものにはあてはまらないような新造語は認められない (Z15, 1040a10-11)^⑧。そしてアリストテレスは、定義をこのように解する場合、「それら〔確立している語〕は、〔定義される当のもの以外の〕他のものにも属することが必然である」 (Z15, 1040a11-12) と述べ、具体例として君の定義を取り上げる。アリストテレスは君の定義として、「やせているとか、白いとか、その他の属性をもつ動物」という説明方式を挙げている (Z15, 1040a13-14)。この説明方式は、「二足動物」のような類と種差による定義との類比で挙げられたものと考えられる。種差の代わりに、「やせている」とか「白い」といった付帯的属性が定義の要素になっているのは、その定義が個別の実体を対象としているからだと考えられる。そもそも定義というのはその対象に固有であり、他のものにはあてはまらない。もし「二足動物」という定義が普遍的な〈人間〉だけでなく普遍的な〈馬〉にもあてはまるとしたら、それは〈人間〉の定義として認められないだろう。「二足

動物」は普遍的な（人間）に固有であり、他の普遍にはあてはまらないのである。¹⁸ 定義が普遍を対象としている限りは、そのように考えてとくに問題は生じない。しかし定義が個別の実体を対象とすることを認めてしまうと、問題が生じてくる。君という個別の実体を定義するにあたって、「やせているとか、白いとか、その他の属性をもつ動物」と定義する場合を考えてみよう。君を他の人間から区別するのに必要となるすべての付帯的属性を挙げれば、君を定義することができそうである。この定義は、先ほど触れた定義の特性、すなわち、定義はその対象に固有であるという特性に従えば、君に固有であるはずである。しかし、先にアリストテレスが注意したことでもあるが、定義を構成する諸々の語——この場合は「やせている」、「白い」といった付帯的属性を示す語と「動物」という類を示す語——は一般的に用いられる語であり、君以外のものにもあてはまる語である。つまり「やせている」とか「白い」といった語で捉えられるものは君以外に多数存在するし、また「動物」と言えるものも多数存在する。そしてそれらの語を結合した、「やせているとか、白いとか、その他の属性をもつ動物」という説明方式もまた、君以外のものにあてはまることが可能である。こうなると、その説明方式は君に固有ではなくなり、それは君の定義として認められないことになるだろう。このようにアリストテレスは、個別の実体の定義が不可能であることを、先に見た、個別の実体が生成消滅をこうむるために定義されえないという説明とは異なる仕方でも説明するのであるが、それは、プラトン主義者の前提において個物とみなされるエイドスに関して、その定義不可能性を示すためにほかならない。

しかしエイドスは、君のように付帯的属性をもつものではないので、やはり、いま見た君の定義不可能性の説明も、そのままエイドスの場合にあってはまりはしないように思われる。実際アリストテレスは、いまの定義不可能性の説明を前提にしながらも、「二足動物」という、アリストテレスにおいては普遍的な（人間）にあってはま

る定義を、〈人間〉というエイドスの定義として挙げ、〈人間〉というエイドスの定義不可能性を示そうとする。その説明は、個物としての性格をもつエイドスに定義があることを認める主張を前提として立て、その前提のもとでは不合理な帰結が生じることを示すという仕方で行われる。その説明は以下のとおりである。

もし人が、すべてのもの〔説明方式を構成するすべての語〕が一方で離れて (χωρῆς) 〔それぞれ別々に〕多くのものに属し、他方で一緒になって (ἅμα) このものだけに属するということを何も妨げないと主張するなら、われわれはまず、例えば「二足動物」が〈人間〉というエイドスだけでなく、両方〔二足動物〕という説明方式の要素の両方〕にも、すなわち〈動物〕と二足〔というイデア〕にも属することになると言わなければならないだろう。(Z15, 1040a14-17)

この一文は、個物としてのエイドスに定義があるという前提と、その前提に立った場合の不合理な帰結を示している。その前提は二つの部分からなっているが、その一方、すなわち、説明方式(定義)を構成するすべての語が個々別々に多くのものに属するということは、すでに見た定義の特性にほかならない。君の定義として取り上げた、「やせているとか、白いとか、その他の属性をもつ動物」という説明方式において、「やせている」、「白い」、「動物」などは一般的に用いられている語であり、それらはそれぞれ多くのものに属するとされた。右の引用の帰結部分に示されているように、アリストテレスは〈人間〉というエイドスの定義として「二足動物」を考えている。ここで注意しなければならないのは、普遍的な〈人間〉の定義として「二足動物」と言われているのではないことである。普遍的な〈人間〉が定義対象とされる場合、「二足動物」という定義は、普遍的な〈人間〉

に固有であるとともに、その普遍のもとに包摂される個々の人間にも派生的な仕方であてはまる。これに対して、個物としての〈人間〉というエイドスが定義対象である場合、その「二足動物」という定義は、個物としての〈人間〉に固有であり、他のいかなる個物にもあてはまらないと考える必要がある。われわれはここで、個々の人間も「二足動物」と言えることから、その定義が個物としての〈人間〉以外の個々の人間にもあてはまると言うかもしれない。しかし、すでに見たように、個々の人間は「二足動物」という定義の対象ではない。個々の人間が「二足動物」と言えるのは、それらが「人間」という普遍のもとに包摂される限りにおいてであり、個々の人間は派生的な仕方です。「二足動物」と言われるにすぎない。そうすると、「二足動物」という定義は個物としての〈人間〉というエイドスに固有であり、その〈人間〉は定義対象と認められることになるように思われる。しかしアリストテレスはそうならないことを、イデア論の前提から示している。すなわち、右の引用の帰結部分で言われているように、「二足動物」という定義は、個物としての〈人間〉以外に、その〈人間〉を構成するイデアとしての〈動物〉と〈二足〉にもあてはまるのであり、それゆえその定義は、個物としての〈人間〉というエイドスに固有ではなく、定義として成り立たないのである。

もう少し詳しく見ることにしよう。個物としての〈人間〉というエイドスの定義として示された「二足動物」という定義の要素、「二足」と「動物」は、一般的に用いられる語であり、新造語ではない。つまり「二足動物」という定義は、定義の特性に反するものではない。問題は、「二足」と「動物」を合わせて「二足動物」にすればその定義が個物としての〈人間〉というエイドスに固有のものとなるかどうかである。エイドスに定義を認める者は、「二足動物」という定義を個物としての〈人間〉に固有のものと考えているはずである。それは、右の引用の条件部分の後半に示されているとおりである。しかしその帰結として、定義はその対象に固有であるとい

う特性に反することが生じる。すなわち、「二足動物」という定義の要素のそれぞれが表しているアイデアとしての〈動物〉と〈二足〉にも、その定義があてはまることになるというのである。しかしなぜそのようなことになるのか。〈二足〉というアイデアから見てみよう。プラトン主義者が〈二足〉をアイデアとみなすことは、アリストテレスに言わせれば、それを〈実体〉とみなしていることにはかならない。ここから、〈二足〉という〈実体〉には「二足である」という述語づけが可能であることになる。また、二足であるものは動物であることが必然であるから、〈二足〉には「二足動物である」という述語づけが可能となる。アリストテレスはこの述語づけを念頭に置いて、「二足動物」という定義は〈二足〉にも属すると述べているのだと考えられる。¹⁹⁾ それでは〈動物〉というアイデアについてはどうだろうか。これについては〈二足〉の場合と同様の説明は難しい。〈動物〉という〈実体〉には、「二足である」だけでなく、「四足である」という述語づけも可能だからである。確かに、〈動物〉は類であるから、「二足である」と限定されることは問題である。しかしここで問題になっている〈動物〉は、個物としての〈人間〉というエイドスの構成要素として見出されたものであり、前提として〈人間〉というエイドスの存在があると言うことができる。この前提がある限りにおいて、〈動物〉に「二足である」という述語づけをすることは許されるのではないだろうか。²⁰⁾ アリストテレスはこのようにして、「二足動物」という定義が個物としての〈人間〉以外にも、すなわち、〈動物〉と〈二足〉というアイデアにもあてはまることを示し、個物としての〈人間〉というエイドスが定義されえないことを示すのである。

エイドスの定義不可能性に関するZ巻第十五章の論述の残りの部分(Z15, 1040a22-27)では、エイドスの定義不可能性を示すのに不可欠の前提、すなわち、エイドスの定義を構成すると仮定される類と種差がアイデアであるという前提について考察が行われている。²¹⁾ そこにおいてアリストテレスは、エイドスの定義不可能性を示すこ

とよりも、イデア論の問題点を指摘することのほうに関心を寄せている。これについてはごく簡単に触れるだけにするが、アリストテレスは、エイドスの定義を構成すると仮定される類と種差を、プラトン主義者がどのようにして認識することができるのかを問題にしている。(人間)については仮の定義——プラトン主義者にとつては仮ではないが——によって認識することができるとして、類と種差についてはどのようにして認識が可能となるのか。アリストテレスはここで、類の定義と種差の定義を考えてそれぞれをそれぞれの定義によって認識するという可能性を示さず、その代わりに、われわれの経験に訴える方法をとる。^⑧すなわち、例えば(動物)は個々の動物に述語づけられることによって認識されるものである(215, 1040a23-25)。プラトン主義者なら「述語づけ」ではなく「分有」と言うだろうが、ともかくイデアとしての類と種差は、それらを分有する個々のものの経験を通じて認識されるという考えが示されている。アリストテレスはそれ以上問題を掘り下げていないが、イデアと感覚的事物との関係を持ち出したということは、Z巻第十四章の末尾でも言及された問題——数的一性の問題——、あるいはいわゆる第三人間論の問題を考えていたのではないかと推測される。ここでアリストテレスは、エイドスの定義不可能性の問題から逸れて、類と種差についても感覚的事物との関係が問題になりうるということ、そしてその問題はイデア論の不合理を示すものであるということに傾いたのだと考えられる。しかしテキストではそこまで語られず、話題は、永遠的な個物としての天体を定義することが不可能であることへと向かう。本節の課題はエイドスの定義不可能性に関する論述をテキストに即して理解することであつたので、天体に関する論述については省略することにする。

本節で見たように、アリストテレスはZ巻第十五章において個別の実体やエイドスの定義不可能性を示しているが、彼自身が〈実体〉と認める個別的な形相についてその定義不可能性を説明するということとは行っていない。

アリストテレスはそれについてはZ巻第十三章の末尾における説明で十分であると考えたようである。いずれにせよ、定義不可能なものとしての個別的実体やエイドスについての説明は、アリストテレスの「形相」概念について考える上で有益であるように思われる。以下で、本節における考察を踏まえつつ「形相」概念について考察し、〈実体〉としての個別的な形相に関する定義の問題について一定の答えを与えることにしたい。

五 エイドスと形相

アリストテレスはZ巻第十三章の末尾で、〈実体〉としての個別的な形相は非複合的なものであるために定義されえないという〈実体〉の定義不可能性に言及し、その際、Z巻第十二章までの定義可能な〈実体〉という見解を思い起こして、その定義不可能性を問題のあることとみなした。そして〈実体〉が或る意味では定義可能であり、他の意味では定義可能ではないということを述べ、この問題に対して「以下の論述」が役に立つことを示唆していた。本稿第二節の終わりでは、Z巻第十五章における論述がその問題に対して役に立つのだと解した。しかしよく考えてみると、Z巻第十四章の論述もまったく役に立っていないわけではないことがわかる。Z巻第十四章においてエイドスは、イデアとしての類と種差からなるものとされており、複合的なものであると考えられる。その構成要素は類と種差であるのだから、エイドスはまさに類と種差に言及する定義の対象であるように思われる。アリストテレス自身はZ巻第十四章において、エイドスを定義の対象として提示してはいない。それはやはり、次の第十五章でエイドスの定義不可能性を示そうと考えていたからだろう。ともかくZ巻第十四章では、定義の問題には触れられず、ただ、エイドスをイデアとしての類と種差からなる複合体とみなすことの不合

理が示されている。エイドスの定義不可能性への言及は行われぬが、エイドスが定義可能であるために満たすべき条件である複合性——イデアとしての類と種差からなっているという——が不合理なこととして示されたわけであるから、その意味で、エイドスの定義不可能性が暗黙のうちに示されたのだと言ふこともできるだろう。このように理解するなら、アリストテレスがZ巻第十三巻末尾で「以下の論述」が役に立つと示唆していたのは、Z巻第十四巻と第十五巻の両方を指してのことであつたと解することもできるだろう。

それでは、Z巻第十四—十五章における論述は、アリストテレスの言う〈実体〉が或る意味では定義可能であり、他の意味では定義可能ではないということに対して、どのように役に立っているのだろうか。Z巻第十三巻では、〈実体〉として認められるのは個別的な形相のみであるという主張が行われていたが、その主張は、Z巻第十三巻末尾に示される〈実体〉の定義の問題を生じさせた。この問題に対する一つの解決法は、本稿第二節においてすでに示したように、派生的な意味での〈実体〉の定義可能性を認めることによつて、定義可能なものも何もないという不都合な帰結を回避するというものである。これも本稿第二節で触れたことであるが、Z巻第十五巻のはじめの部分 (Z15, 1039b20-27) で「説明方式」として示される形相すなわち普遍的な形相への言及が行われていることが、そのような派生的な意味での定義をアリストテレスが認めていたことを示していると言ふことができる。アリストテレスは、〈実体〉としての個別的な形相は普遍化されたもの、すなわち普遍的な形相としては定義可能であるという仕方、派生的な意味で定義可能なものであると考えている。アリストテレスの言う普遍的な形相は、類と種差への言及によつて定義されるが、それら類と種差は両方もが〈実体〉であるのではない。類と種差の両方を〈実体〉とみなしてしまうのはプラトン主義者であり、そのイデア論の不合理がまさにZ巻第十四—十五章において示された。Z巻第十四—十五章の論述が〈実体〉の定義の問題に役立つ

ているとすれば、それは、普遍的な形相の定義を考える際にプラトン主義者のイデア論の考え方を持ち出してはならないという意味で、警鐘として役立つと言うことができるだろう。普遍的な形相の定義における類と種差については、すでにZ巻第十二章で説明されているのであるが、それでもそれを正しく理解しないプラトン主義者がいるとアリストテレスは考え、プラトン主義者のイデア論をZ巻第十四―十五章において批判しているのである。Z巻第十二章における定義論によれば、類は可能的にあるものであり、種差が現実的にあるものである。(人間)という普遍的な形相を「二足動物」と定義する際、その要素である二足と動物はそれぞれが(実体)であるのではなく、最下の種差としての二足だけが(実体)とみなされる。このように理解すれば、(人間)という一つのものが(二足)と(動物)という二つのものであるという不合理も生じない。

〈実体〉としての個別的な形相が、それ自体は非複合的なものでありながら、派生的には、すなわち、普遍化された普遍的な形相としては定義可能であると理解することは、Z巻第十三章末尾のアリストテレスの発言をうまく説明する一つの解釈である。この解釈は、個別の実体の定義不可能性に対しても新しい見方を可能にする。Z巻第十章以降、個別の実体は個別的な質料と個別的な形相からなる個別的結合体と理解されているが、個別的結合体も、個別的な形相が普遍化されるように、普遍化されることが可能である。それはZ巻第十一―十一章における定義論に見られる考え方であり、個別の実体(個別的結合体)を普遍化した普遍的結合体——これは普遍的な質料と普遍的な形相からなる——というものが認められるのである。これは普遍的なものであるから定義可能なものであるが、その場合の定義は、これまで見てきた類と種差による定義とは異なる新しい定義、すなわち、質料と形相に言及する定義である。具体的にはH巻第二―三章に示されているが、例えば敷衍を、「そのように置かれている木材」と定義するような場合がそうである。その場合に定義されているのは、一定の配置という普

遍的な形相と木材という普遍的な質料からなる普遍的結合体としての敷居である。これについても、個別的な形相の、派生的な意味での定義可能性と同じ仕方での解釈が許されるように思われる。すなわち、個別結合体はそれ自体としては定義不可能であるが、普遍化されることによって、すなわち普遍的結合体として、定義可能である、と解釈できるだろう。

個別的なものを普遍化することによって定義可能なものとする考え方は、プラトン主義者とは異なる「普遍」理解のゆえに成り立つ。プラトン主義者は普遍を、端的な意味で離在可能なものであり、或るこれであり、(実体)であると考えていた。そのように特徴づけられる普遍がイデアにほかならない。アリストテレスに言わせれば、そのようなイデアは、普遍的でありかつ個別的存在であるという奇妙な存在であり、Z巻第十四—十五章やその他のイデア論批判の箇所を示されているような多くの不合理をもたらすものである。これに対してアリストテレスが理解する普遍は〈実体〉ではない。「或るこれ」とか「離在可能なもの」という特徴づけは行われるが、個別の実体やイデアにあてはめられるのとは異なる仕方と言われる。「或るこれ」については、一定の実体名辞で呼ばれるという意味でそう特徴づけられるのであり、また「離在可能なもの」については、端的な意味でのそれではなく、「説明方式において」という限定を付したそれとして特徴づけられる。説明方式における離在可能性というのは、定義に際しての離在可能性ということであり、まさに個別的な形相を普遍化して普遍的な形相として定義することができるということにほかならない。⁵⁵ 個別の実体(個別結合体)も普遍化されて普遍的結合体として定義することができるので、個別の実体(個別結合体)についても説明方式における離在可能性が認められてよいように思われるが、アリストテレスはこれを認めていない。思うに、厳密な意味での定義はやはり類と種差による普遍的な形相の定義なのであり、質料と形相による普遍的結合体の定義は二次的な意味で定義とみなさ

れているのだろう。それで、形相のみが、説明方式における離在可能性という特徴づけを許されるのだと考えられる。

さて、最後に、アリストテレスの実体論における〈実体〉探究という全体的な視点から、〈実体〉としての個別的な形相の定義不可能性と、派生的な意味での定義可能性について考察したい。アリストテレスはZ巻第十三—十六章というひとまとまりにおいて、個別的な形相のみが〈実体〉であり、いかなる普遍も〈実体〉ではないことを明らかにした。その結果、Z巻第十二章までの〈実体〉としての普遍的な形相という見解は認めがたくなった。しかしここで注意しなければならないのは、Z巻第十五章のはじめの部分で、普遍的な形相と考えられる「説明方式」としての形相が〈実体〉とみなされていたことである（Z15, 1039b20）。これを見て、Z巻第十三—十六章においてアリストテレスは混乱したことを述べているのだと考えることは簡単である。しかしそう考えるのではなく、「〈実体〉」という語の適用についても本来的な場合と派生的な場合とが分けられるのだと考えるべきである。本来的な意味では、Z巻第十三章で示されたとおり、「〈実体〉」と言えるのは個別的な形相のみである。しかし個別的な形相が〈実体〉であることから派生して、その普遍化されたものである普遍的な形相も「〈実体〉」と呼ばれるのだと考えられる。Z巻第十五章のはじめの部分での「〈実体〉」という語は派生的な仕方で行われているのだと言うことができる。

ところで、アリストテレスが本来的な〈実体〉として個別的な形相を考えたことには、いかなる意味があるのだろうか。これは、〈実体〉性の基準としてアリストテレスが何を考えていたかということから説明されるべきである。Z巻第十二章までは、〈実体〉性の基準として定義可能性が第一に考えられていた。とくに、質料ではなく形相が〈実体〉であると主張するために、定義可能性という条件は不可欠であった。しかし質料の〈実体〉

性を退けた後、アリストテレスは、普遍的な形相を〈実体〉とみなすことが、プラトン主義者の見解、とくに個別的実体から離在するエイドスを認める見解と混同されかねないと考えたのではないだろうか。そこでアリストテレスはそのような混同を生み出さないためにも、まず、個別的実体に固有の個別的な形相が〈実体〉であると主張し、さらに、プラトン主義者の見解を取り上げて批判し、自らの「形相」概念と彼らの言う「エイドス」がいかにも異なっているかを明らかにしたのである。ここで採用されている〈実体〉性の基準は基体性であると言える。基体から独立に普遍が存在するというプラトン主義者の考えには与せず、あくまでも基体があるからこそ普遍が存在するという立場を貫くのである。ただ、その場合に注意しなければならないのは、形相と質料との関係について、質料が形相の基にあるという考えはここでは考慮されていないということである。究極的な基体としての質料が〈実体〉ではないことは、Z巻第三章において早々に示されていた。Z巻第十三—十六章では、普遍的な形相にとって個別的な形相が基体として必要不可欠であることが暗に示されているのだと考えられる。なるほど生成論の文脈などを見ると、普遍的な形相の基体として質料が考えられている。一定の質料に普遍的な形相が述語づけられることによって個別の実体が成立すると説明されているのは事実である。しかしわれわれがいま問題にしているZ巻第十三—十六章章は、そのような生成論における個体把握よりもっと複雑な個体把握を前提にしている。すなわち、Z巻第十一—十一章において確立された個別的結合体と普遍的結合体との対比が成り立つような個体把握を前提にしている。この前提があるからこそ、普遍的な形相の基体としての個別的な形相という見解が可能となるのである。アリストテレスはZ巻第十六章までの〈実体〉探究の一区切りにおいて、最終的に基体性を〈実体〉性の基準と考えるに至った。しかしそれは定義可能性を完全に否定することではなかった。〈実体〉性の基準としての定義可能性は、〈実体〉としての個別的な形相が派生的には定義可能であるという仕方では、

いわば弱められた仕方では基準として働いている。Z巻第十四—十五章におけるイデア論批判は、このように（実体）性の基準についてアリストテレスに最終的な態度決定をさせるという意味で、実体論において不可欠の意義をもっていると言いうことができるのである。

註

- (1) ただしA巻第九章のはじめの部分では、「諸々のイデアを原因として立てる人々」(A9, 990a34-b1)の説としてイデア論への言及が行われている。しかし990b9の「εἰκονηγεῖν」以降、意味上プラトン主義者が主語になっていると考えられる動詞が一人称複数形で用いられている。Werner Jaeger, *Aristotle: Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin, 1923, pp. 175—176よりArthur Madigan, *Aristotle's Metaphysics Book B and Book K1-2, Translated with a Commentary*, Oxford, 1999, p. 53を参照。
- (2) さまざまなアポリアが検討されるB巻の一節(B2, 997b3-5)におけるイデア論批判では、「われわれ」の説としてのイデア論への言及があり、A巻第九章における批判が指示されているが、その一節の中途(B2, 997b8-12)で「彼ら」のイデア論に対する批判が変わっている。Madigan, 1999, p. 54を参照。
- (3) 本稿で主題的に取り上げるZ巻第十四—十五章の論述が、実体論の中でもとりわけまとまったイデア論批判である。その後のZ巻第十六章の一節(Z16, 1040b27-34)でもイデア論批判が行われているが、ここではイデア論に一定の評価が与えられている。またZ巻第八章の一節(Z8, 1033b26-28, 1034a2-3)では、個別の実体の生成においてイデアが役に立たないことが述べられている。それからまたZ巻第十一章の一節(Z11, 1036b12-20)では、事物を数に還元するピュタゴラス派との関連でプラトン主義者の見解が引き合いに出され、批判が行われている。
- (4) アリストテレスは「基体」の用法として、「質料」「形相」「結合体」の三つを挙げている(Z3, 1029a2-3)。
- (5) 基体としての形相がいかなるものであるかは説明されていない。一般的には、属性の担い手という意味で基体であると説明される。W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, II, Oxford, 1924, p. 164を参照。

- しかし本稿での考察によって、それとは異なる意味での基体性も考えうるものが明らかになるだろう。
- (6) Z巻第四―第六章では「それぞれのものの本質」が問題にされており、本質をもつのは「それぞれのもの」である。「それぞれのもの」の例として「君」が挙げられている (Z4, 1029b14-16) ことから、「それぞれのもの」は、Z巻第一章で言われる個物としての実体 (個別の実体) であると考えられる。
- (7) 形相の質料への述語づけはZ巻第三章の一節 (Z3, 1029a23-24) において言及されている。その考えはZ巻第七―九章における生成論やH巻第二―三章における定義論において確認できる。
- (8) 類と種差による〈実体〉の定義については、定義の一致性の問題が論じられるZ巻第十二章を参照。定義対象としての普遍的な形相は「種形相」と呼んでもよい。しかし普遍的な形相を種と同一視することはできない。というのもZ巻では種は、普遍的な質料と普遍的な形相からなる普遍的結合体とみなされているからである (Z10, 1035b27-30, Z11, 1037a5-7)。
- (9) 「普遍」と「類」の検討は別々に行われるのではなく、Z巻第十三―十六章において一緒に検討される。Ross, 1924, p. 104を参照。実際アリストテレスはZ巻第十三章において、いかなる普遍も〈実体〉ではないという主張を正当化するにあたって、類についても〈実体〉ではないことを示している。また本稿で取り上げるZ巻第十四章でも、類を〈実体〉とみなすことの不合理がアイデア論批判という形で説明されている。
- (10) プラトン主義者の言う「エイドス」は種形相に限定されるものではない。実際「もし諸々のエイドス (τα εἶδη) が存在し、〈動物〉 (と) いう類」が〈人間〉や〈馬〉 (と) いったエイドス」のうちにあるなら」 (Z14, 1039a26-27) と言われる際の「τα εἶδη」はアイデア一般を指していると解することができる。M. F. Burnyeat et al., *Notes on Book Zeta of Aristotle's Metaphysics*, Oxford, 1979, p. 137を参照。しかしFrede & Patzigも指摘するように、直前で「エイドスを類と諸々の種差からなるとする人々」 (Z14, 1039a26) というように、「種形相に限定された用法が見られること」また「1039a30-33で類の存在が帰結として出てくる推論の条件節において種形相の存在が立てられており、「もし諸々のエイドスが存在し」という部分との対応が考えられることから、1039a26-27の引用に見られる「諸々のエイドス」を種形相の意味に解することも可能である (Michael Frede & Günther Patzig, *Aristoteles: Metaphysik Z, Text, Übersetzung und Kommentar*, II, München, 1988, p. 266)。^{1039a26-27の解釈はともかくとして「エイドスを類と諸々の種差からなるとする人々」というように種形相に限定さ}

- れる「エイドス」の用法があることを拠り所に、本稿では便宜上、「エイドス」を種的イデアを指すものとして用いることにする。
- (11) 動物の諸部分と単純物体は、〈実体〉の探究が本格的に開始される前のZ巻第二章において、一般に実体と考えられているものとして言及されている。Ross, 1924, p. 218およびFrede & Patzig, II, 1988, p. 297を参照。「なるもの」と〈あるもの〉、そしてエイドスについては、イデアとしての類を批判するZ巻第十四章、そしてエイドスの定義不可能性を示すZ巻第十五章との連関を指摘することができるだろう。
- (12) その要点は以下のとおりである。「こうして、普遍的に (καθόλου) 語られるもののいかなるものも〈実体〉ではない」と、またいかなる〈実体〉も諸々の〈実体〉からなるのではないということが明らかである」(Z16, 1041a3-5)。
- (13) 拙稿「アリストテレス『形而上学』Z巻第十三章における「普遍」の問題」九州大学大学院人文科学研究院『哲学年報』第六八輯、二〇〇九年、三五—七二頁を参照。
- (14) アリストテレスがZ巻第十三章において〈実体〉と認めるのは個別的な形相である。しかしプラトン主義者は、アリストテレスの言う〈実体〉を〈人間〉のような普遍と解した上で、その定義の要素をより普遍的な〈実体〉とみなしていた (Z13, 1038b16-23)。拙稿、二〇〇九年、五四—六〇頁を参照。なお、後で見ると、アリストテレス自身は〈実体〉としての個別的な形相そのものがそのような要素によつて説明されるとは考えない。
- (15) Bostockが指摘するとおりである (David Bostock, *Aristotle's Metaphysics Books Z and H, Translated with a Commentary*, Oxford, 1994, p. 203)。なお、以下に述べるこの問題に対する対処の仕方は、Bostockのそれとは異なる。
- (16) Ross, 1924, p. 211を参照。
- (17) アリストテレスは次のように述べている。「そしてさらに、「これ」(το τούτο) すなわち〈実体〉が——もしこれが何らかのいくつものからなっているなら——諸々の〈実体〉からなっているのでも或るこれからなっているのでもなく性質からなっているということは不可能であり、また不合理である」(Z13, 1038b23-25) と。これを見ると、〈実体〉がいくつもの要素からなるものだとなれば、それは諸々の〈実体〉からなっていると言われているのだとわかる。しかしZ巻第十三章の末尾で示されるように、〈実体〉は要素からなるものではなく、諸々の〈実体〉からなるものではない。
- (18) 「諸属性」(τα ἴδιον) は、説明方式においても (λόγῳ)、時間においても (ᾠκτώσῃ)、生成においても (γενέσει)、〈実体〉より

- もより先であることはいえなない」(Z13, 1038b27-28)と述べられている。「説明方式」「時間」「生成」という三つの観点が挙げられているが、「時間」と「生成」を同じ観点とみなしてよいなら、二つの観点が挙げられていることになる。Ross, 1924, pp. 210-211を参照。Rossは'yevocet'を'yvocoet'に変えるA. R. Lordの提案に言及しているが、Frede & Patzigがその提案に従っている(Frede & Patzig, II, 1988, p. 257)。この提案はZ巻第一章の一節(Z1, 1028a32-33)との並行を考えたものである。
- (19) プラトン主義者は類と種差を〈実体〉と考えており、そのことを示すために「二足」「(動物)」と表すことにする。註(30)を参照。
- (20) 直接的にはZ巻第四―五章を指している。Ross, 1924, p. 211およびFrede & Patzig, II, 1988, p. 263を参照。Z巻第四―六章では、質料形相論の観点に立たずに個別の実体の本質が問題にされ、個別の実体とその〈実体〉とが同一視されていた。しかしZ巻第十三章では質料形相論が前提になっている。この前提においては、個別の実体の形相ないし本質が〈実体〉である。いま問題にしている引用で「〈実体〉」と言われているのは、個別の実体の形相ないし本質であると考えべきである。Z巻第十二章において類と種差によって定義されるのも、そのような形相ないし本質である。
- (21) 前註でも触れたようにZ巻第四―六章においては、質料形相論の観点がないため、普遍的な形相ないし本質が〈実体〉であるとは言えない。しかしZ巻第七―九章の生成論とZ巻第十一―十二章の定義論によって、普遍的な形相ないし本質が〈実体〉であるという見解が確立される。
- (22) 個別的な形相は何かに述語づけられるものではなく、むしろ普遍的な形相が述語づけられる基体であると考えられる。拙稿、二〇〇九年、五一―五二頁を参照。補足すると、もし個別的な形相に普遍的な形相が述語づけられないとしたら個別的な形相は把握されえないものであることになるので、その述語づけは成り立つと考えられる。
- (23) 拙稿、二〇〇九年、五二―五四頁、および拙稿「実体と形相——アリストテレスの実体論における離在可能性の問題——」(西日本哲学会『西日本哲学年報』第一七号、二〇〇九年(二)、一一―一九頁の「おわりに」(一三―一四頁)を参照。この揺れについては、本稿の最後に、実体論におけるイデア論批判の意義について考える際にもう少し詳しく説明する。
- (24) 拙稿、二〇〇九年(二)、八一―八二頁を参照。
- (25) 一般にそのように解される。異なる解釈としては、Z巻第十六章における動物の諸部分と単純物体に関する論述に見られ

る「可能態—現実態」——魂の諸部分について言われる——への言及を、〈実体〉の定義不可能性の問題に対する解決の手段とみなす Wedin の独特な解釈がある (Michael V. Wedin, *Aristotle's Theory of Substance: The Categories and Metaphysics Zeta*, Oxford, 2000, pp. 360–362, 385ff.)。

(26) 厳密に言えば、形相は説明方式の対象である。それは Z 卷第十一十一章における形相の定義についての説明から明らかである。また『自然学』にも説明方式の対象としての形相への言及がある (Ph. A7, 191a13)。

(27) 拙稿、二〇〇九年、五四—六〇頁を参照。

(28) 拙稿、二〇〇九年、六一—六三頁を参照。

(29) Z 卷第十三章におけるプラトン主義者の主張では、「或る〈実体〉の定義のうちに含まれる」類が問題にされており、類が〈実体〉の定義の要素であることが明示されていた。しかし Z 卷第十四章では、「或るエイドスのうちに含まれる」類が問題にされており、類がエイドスの定義の要素であるとは言われていない。ここでプラトン主義者は、類をエイドスそのものの構成要素と考えている。これは、Z 卷第十五章でエイドスの定義不可能性が示されることと関連していると考えられる。

(30) イデアについては「離在可能」よりも「離在」のほうがふさわしい。これについては、次に見る引用の解釈において説明する。プラトン主義者がイデアを *·oia* とみなす (とアリストテレスが説明する) 際の *·oia* については、「実体」ではなく「〈実体〉」と訳すことにする。アリストテレスの言う形相を示す *·oia* を「〈実体〉」と訳しているので紛らわしいが、あえて紛らわしいままにしておく。アリストテレスにおいて形相は事物の存在の原因としての役割を担わされているが、それはプラトン主義者の言うイデアについても言えることである。アリストテレスが批判するのは、イデアの端的な離在可能性 (離在性) であり、また類と種差の (実体) 性である。

(31) この「エイドス」の解釈については、註 (10) を参照。

(32) 「動物」、「人間」、「馬」という表記は、アリストテレスの言う普遍的な形相に用いることにしていたが、註 (30) で述べたとおり、プラトン主義者の言うイデアにも用いることにする。

(33) 〈人間〉のうちにある〈動物〉と〈馬〉のうちにある〈動物〉は、説明方式においては——言い換えれば種類としては——同一である。

- (34) 註(14)を参照。
- (35) 註(30)を参照。
- (36) A^o写本の読み方をとる (Ross, 1924, ad loc.)。Jaeger¹⁴ 'to ev'を'to ov'に変えよう (Werner Jaeger, *Aristotelis Metaphysica*, Oxford, 1957, ad loc.)。Frede & Patzig¹⁵ A^o写本に従って 'ev'を読まなす (Frede & Patzig, 1988, I, ad loc., II, p. 269)。
- (37) 注釈者たちが指摘するようになつて、引用 (Z14, 1039a33-b2) にある二つの問いは「プラトン『パルメニデス』(31b1-2) および『レポス』(15b6-8) を想起させよ」。
- (38) 「四足動物」と言っただけでは馬の定義とは言えないだろうが、簡略化してそれを馬の定義としておく。『動物誌』によれば、馬は四足胎生類に分類され、身体部分の形態などによつて他の四足動物と区別される (HA A1, 486a21-b11, B1, 497b13-16)。
- (39) アリストテレスは『動物誌』において人間以外の動物の運動を説明する際、「四足」と「多足」の両方に言及している (HA A5, 490b3-4, B1, 498b5-6)。
- (40) 類の数的多数性という前提を立てても不合理に陥るということをアリストテレスは示そうとしている。不合理を示す議論が 1039b7-8-1039b9-14G 二つであることは解釈者も一致しているが、前者の議論の意味をどう理解するかについては一致していない。RossはZ巻第十三章に見られる主張、すなわち、「それらの〈実体〉が一つであり、それらの本質が一つである」ところのそれら「同一の〈実体〉すなわち同一の本質をもつ諸事物」は、それら自身も一つ「同一」(Z13, 1038b14-15) であるという主張を引き合いに出して、〈実体〉としての類をもつエイドスが無限に近いほど存在するというこの不合理を示している (Ross, 1924, p. 212)。¹⁶ しかし Frede & Patzig も指摘するようになつて、「いま問題にしている Z 巻第十四章の一節では〈実体〉の数的多数性が前提になつており、Z 巻第十三章におけるその主張を引き合いに出すことは不適切である (Frede & Patzig, II, 1988, p. 273)」。Z 巻第十三章におけるその主張は、〈実体〉が個別の実体に固有であるという前提のもとで、普遍が〈実体〉だとしたらこれをもつ個別の実体がすべて同一のもものになつてしまふという不合理を示すためのものであった。これについては、拙稿、二〇〇九年、四五―一五〇頁を参照。Frede & Patzig は Z 巻第三章において類が個別の実体の〈実体〉の候補として挙げられていたことを引き合いに出して、エイドスが無限に近いほど存在することになるといふ問題を説明しようとしている。また Bostock は「エ

イドスが無限に近いほど存在する」という帰結が、類の数的多数性という前提の帰結であるわけではないことを指摘している (Bostock, 1994, pp. 210-211)。

- (41) 以下に示した Z14, 1039b14-16 の解釈は伝統的なものではない。Ross, 1924, p. 213, Burnyeat et al., 1979, p. 140, Bostock, 1994, p. 212 を参照。この解釈では、「それ」多数存在する〈動物〉それ自体は何からなるものか (ἐκ τίνος τοῦτο) (Z14, 1039b14) とどうなるに、*τοῦτο* は、諸々のエイドスのうちに個々に存在する〈動物〉それ自体を指すとされる。これに対して Frede & Patzig は E J 写本に従って、*τοῦτο* の代わりに、*τοῦτον* と読んで、その疑問文の主語として、〈人間〉のようなエイドスを考える。この場合、その問いは、例えば〈人間〉はどの〈動物〉それ自体からなっているのか、というような問いになる。その意味はこうである。〈人間〉はこれに固有の〈動物〉それ自体からなっているが、この〈動物〉それ自体は他のエイドス——例えば〈馬〉——を構成する〈動物〉それ自体と異なるものではない。そこで、Frede & Patzig が解するような問いが出てくるのである。Frede & Patzig, II, 1988, pp. 276-277 を参照。また Halper は、*τοῦτο* はその書未読み、これが〈人間〉のようなエイドスを指すと解しよう (Edward C. Halper, *One and Many in Aristotle's Metaphysics: The Central Books*, Columbus, 1989, pp. 134-135)。

- (42) アリストテレスは「感覺的諸事物の場合には」と語っているだけで感覺的事物とエイドスとの関係を問題にしていることを明言してはいない。(すく後 (Z14, 1039b18) に「それら〔感覺的諸事物〕のエイドス」という言い回しがあり、これによって感覺的事物とエイドスの関係が問題になっていると解することができる。しかしその「エイドス」は一般的にアイデアを指す用法ともとれる。) しかし、エイドスと類との関係と類比的に説明されることとして、感覺的事物とエイドスとの関係を考えることは自然である。Ross, 1924, p. 213 を参照。これに対して、あくまでも類が問題になっていると考え、感覺的事物と類——例えばソクラテスと〈動物〉——との関係を考える解釈もありうる。Frede & Patzig, II, 1988, p. 278 を参照。(この場合、すく後の「それら〔感覺的諸事物〕のエイドス」は一般的にアイデアを指す用法であることになる。なお、Frede & Patzig は「それらのエイドス」という部分を、E J 写本に従い、「それらのアイデア」と読んでいる。)

- (43) ソクラテスは厳密な意味では「二足動物」という定義の対象ではないが、派生的な意味では定義の対象として認められる。というのもソクラテスは、その普遍的な形相である〈人間〉が「二足動物」と定義されることを通じて、「二足動物」と説明されうる。

- あるいは、「二足動物」と定義される「人間」という普遍のもとに包摂されていることによって、そのように説明されうるからである。
- (44) この一文は‘*ἄνθρωπος*’という語を含んでおり、「こうして」という訳語で始めることができた。Rossは「*ἄνθρωπος*」を「それゆえ」と解している (Ross, 1924, p. 214)。この解釈はBunney et al.によって批判された (Bunney et al., 1979, pp. 144-145)。個別の実体の定義不可能性の説明のゆえにエイドスの定義不可能性が示されるわけではないであろう。なお、Frede & Patzigは「の一文の直前 (Z15, 1040a5-7) で個物一般——エイドスも含む——の定義不可能性が語られていると解し、「それゆえ」という解釈を正当化しようとしているが (Frede & Patzig, II, 1988, p. 289)、『その箇所では感覚的な個物の定義不可能性が語られていると解するほうが自然である。』
- (45) プラトン主義者はイデアを個物とみなしているということがある。Ross, 1924, p. 215を参照。
- (46) Bostockによれば、アリストテレスがここで新造語として考えているのは、プラトン主義者の言う「人間それ自体」などの言い回しであるという。Bostock, 1994, p. 221を参照。
- (47) 実際には個別の実体には定義はない。これはすでに見たとおりである。
- (48) もちろん「二足動物」は個々の人間にもあてはまるが、それは個々の人間が定義対象であるということではない。註(43)を参照。
- (49) Bostock, 1994, pp. 219-220を参照。Frede & Patzig, II, 1988, p. 291を参照。
- (50) Frede & Patzig, II, 1988, p. 291を参照。
- (51) アリストテレスはこの箇所を「類と種差からなるイデアを「イデア」と呼んでいるが (Z15, 1040a22, 24)、『わかりやすいように「エイダス」としてあげ。』
- (52) 先の引用箇所 (Z15, 1040a14-17) に続く部分 (Z15, 1040a17-22) では、その引用において「二足動物」という定義をもつとされた類と種差について、それらがイデアであることが確認されている。
- (53) Bostock, 1994, p. 220を参照。
- (54) Bostock, 1994, pp. 184, 256-257を参照。

(55) 拙稿、二〇〇九年(二)、一二頁を参照。

本稿は科学研究費補助金若手研究(B)による研究成果の一部である。